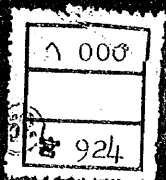


尋常小學讀本

三



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

小學校教科用書



尋常小學讀本

明治二十年五月文部省編輯局

尋常小學讀本卷之三

目次

正直もの

まこと

かひま

二郎のおもちやを染めたる話(二章)

米

道長の話

(二章)

宮本實次



880/0623

あきよと正雄との話

えくら

塙保巳一の話

次郎と三郎との話

九年母の話

えりねずみ

正作病氣になりー話

ほねをーみせー馬の話

正雄の正直

馬

馬の童を助けー話

四季

酒井忠勝の話

作太郎の鳩

作太郎の手紙

桑つみ女



招魂社

行成と實方との話

かうまんかる男

虎と狐どの話

燕

燕の巢を奪ひ雀の話

尋常小學讀本卷之三

第一課

正直もの

松平丹後守といふ大名に、つかへたる小坊主
有り。ある朝、さうちを去ながら、帯にて
やりをつかふまねをかゝるにあやまりて、
丹後守が、ひさうの松の枝を打ち折りたり。
小坊主も、大にくいて、此事、丹後守に知れ

かば、如何かる目ふ
あもんかとえんばい
せり。丹後守も、かく
とも知らば、出で來
られ、松の折れたる
を見、忽ちかほ色を
かへ、「たれが、之を
折りしぞ」ときびしく



とはれたり。

かたへにありし人々も、小坊主の折りしを
見たれど、かれらとがめられんことをあま
れみ、何の答をもかさぐまゝに、小坊主ハ、
恐るゝすみいで、「私ガ、やりをつかふ
まねをいたし、つい折りましてござります
と有のおゝにまうたり。

丹後守ハ、「にくきやつかふ」と其まゝ、あへ

入られたり。されど、又小坊主の正直ある
をかんぞんせられ、其後小坊主をよひ出し、
わざりをぬぎて、あたへられたりといふ。

松平 丹後守 坊主 箒折

第二課

まさと

詐二云はず、あざむかば、

誠の道を守るべし。

心を安く持たんにて、

誠の道を守るべし。

月日たのしく、過ぎんにて、

誠の道を守るべし。

けふもあしたもかはりなく、

誠の道を守るべし。

如何あるまことに、あふとても、

誠の道を守るべし。

ゆめこの掟忘れずて

誠の道を守るべし。

詐道安月過掟忘

第三課

かひこ

かひこは蛾の卵よりかへりて、小さきはたか
虫となり、桑のむを食ひて成長す。十分
成長して、もや桑のはをくもぬやうに

あるときは、口より糸

を出し。

かく糸を

出れど、

まゆと

よべる巢

をつくる

ためなり。



かひまは、此巢の中にまもりて、凡そ十三日間眠るものなり。その眠さむる時は、蛾とかり、まゆを破りて出づ。

此まゆより糸を取りて、絹にかり、衣服などをつくる。かひと、もう蛾とかりて、まゆを破りて出づるときは、糸ハ、きれいにかる故に、糸を取るには、蛾とからざるやうにするなり。

此まゆより取る生糸は、我が國の産物中にて、甚だ大切なる物なり。

蛾 桑 絹 衣服 産 甚

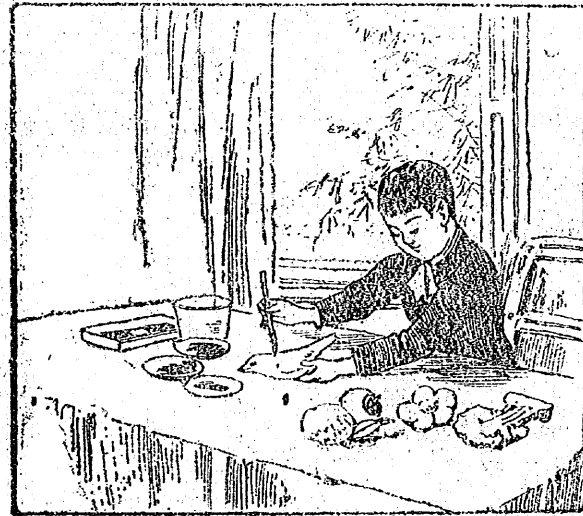
第四課

二郎のおもちやを染めたる話 一
母は、二郎に、繪具一はことおもちやとをあたへたり。繪具はこにも、赤青黄の三色ありて、おもちやは、紙にてきりたる、鳥

花木柿柚子の五つかり。

二郎ハ此繪具とおも
ちやどをもち、何か
かんがへて居たり
が、赤き繪具にて花
ゝを染めたるに、美く
ゝき花とかりたり。

二郎ハ喜び、次に青色



にて鳥を染め、黄色にて柿を染めたり。
されど二郎は、青赤黄の外に、繪具を持た
ざれば、木を染むる色を考へ付かざりき。
それ故に、二郎ハ、母に、今一色の繪具
を求めたり。

母は、二郎に、黄と青とをまぜて見よ、木
を染むるに、よい色が出来るからんと
云へり。二郎ハ、直に、母の云ひとほり

にかゝるに、美しくき緑色となりしを、
二郎ハ大に喜び、木を染むるには、これ
がよき色と思ひたり、

染 繪具 青 黄 柚子 求 緑

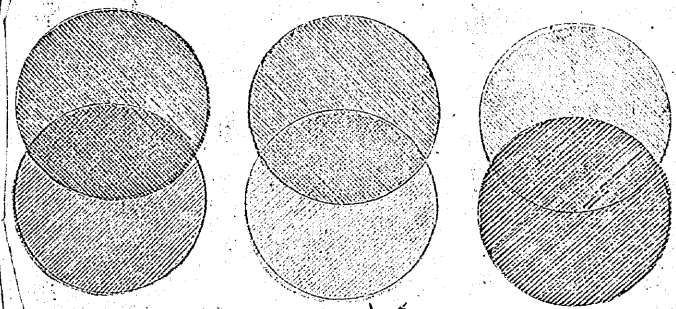
第五課

二郎のおもちやを染めたる話 二
次の日、母ハ、二郎に向ひて、「黄と青とを
まぜると、何色になるぞ」と問ひしに、二郎

ハ、「緑でありまほ」と答へたり。

母ハ、又二郎に、「黄と赤とをまぜて見よ」
と云へり。二郎ハ、直に、其二色をまぜ、
だいくのやうなる色を得たり。母ハ、
それを橙黄色かりと教へ、二郎ハ、此色
にて柚子をそめたり。

二郎ハ、黄と青とをまぜて、緑をこしらへ、
黄と赤とをまぜて、橙黄色をこしらへたれ、



ど、未だ青と赤とを
まぜざりし故に、其二色
をまぜたるに、一つの
美しくき色を得たり。
今二郎の得たるハ、紫
色にてありき。

二郎は、喜びて、母のもと
に行き、自ら一つの色

をまゝらへたる事をつけ、獨樂を持ち、
來まで、紫色に染め付けたりとぞ。

問 得 橙 未 紫 獨 樂

第 六 課

米

吾等の食する米は、一方からぬほねをり
にて、つくりたるものなり。されば、たとへ
一つぶにても、そまつにあすべからば。

米には、粳と糯とあり。粳は飯に炊き、糯は、ははめいと、又もちにつく。

此等の米は、多く水田に作れる稲にみのるものなり。

稲の種を蒔くところを苗代田と云ふ。苗代田に、種を蒔きて、其苗六七寸に至りし時、之を本田にうつす、これを田うゑと云ふなり。

本田に植ゑし後は、まばら草を取りて、稲の成長を助く。稲のほの出でし後ハ水を落して、またにかゝるなり。

稲のほ、十分まゆくたる時は、之をりて



四五日ほし、稻こきにて、ほをよき落し
おくふるひにてふるひ、又たうみにかけて、
實とまひかどを分つ、この實を粳と
いふ。この粳をむろにひろげ、よく日
にほし、それをすりうすにてひき、ふさふ
びたうみにかけて、もみうらを去り、やう
やくに米を得。

此米を、白にてつきあらげ、ぬかをさり、

はじめ、飯に炊きて、食することを得る
あり。

粳 糯 炊 稻 苗 寸 植 草 粳

第七課

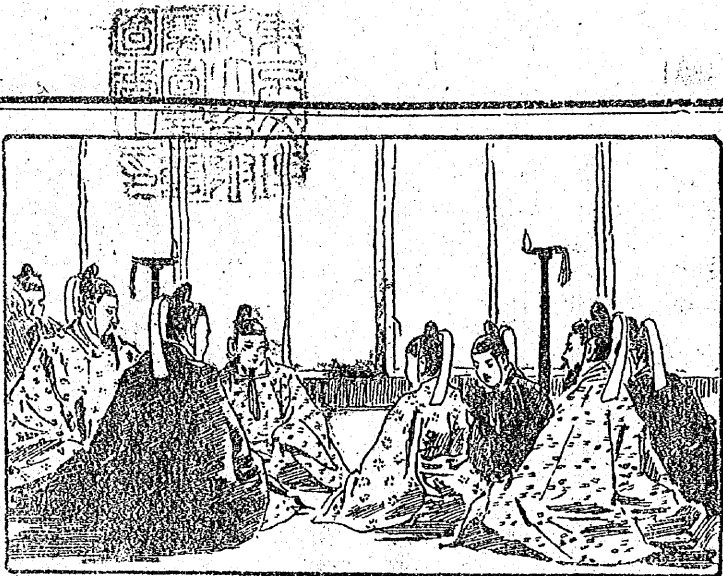
道長の話 一

昔花山天皇の御代に、道長と云へる人
ありけり。ある年、五月雨降りつゝきて、物
さびしき夜、人々と共に、天皇の御そば

に侍りき。

時に、天皇、人々におほせて、畏ろき話を
かさゝめたまふ。此時代の人々、世に
むけ物などのあることを信じたれを、皆々
恐るゝことゝなりき。

天皇、かく多くの人、あつまり居てさへ、さび
しくおぼゆるに、人なき所は、如何からん。
此人々の中にて、たれぞ左やうの所へ、



行き得る者あるやと
とはせたまへり。

御前の人々、皆かほ見
合せて、たれ一人も、ま
からんと答へ一人か
りき。あるに道長
ハ、いづこかりとも
おほせにあらがひて

まゐるべ」と申上げたり。

天皇「そは面白く、たゞちに大極殿へ行けよ」とおほせられぬ。人々は、かほの色青ざめて、より無きこと申上げたりと思へり。

されど、道長一人は、心に畏るゝ所なければ、少しも氣色かはらざりき。

道長 皇 御侍 畏 申 大極殿

第八課

道長の話 二

道長は、御前をゑりぞきて、さびき眞夜中を物ともせび、直に大極殿へ出で行きぬ。此時道長の兄、二人も、まゝ他の處へ行けとおほせられ、が、皆行くべきところ迄は、行き得ずして、中途より歸れり。然るに、道長は、久しく歸り來らざりしかを、いふからんとおほしめ、わづらひたまひたり。

やがて道長は、大極殿の内の柱を削り、
其屑を持ちてまゐれり。

天皇ハ、あくる

朝にかりて、

「此削り屑

を持ちて、

行きて見て

來よ」と



おほせられさり。其人かゝこまり、大極殿
に行きて、削り屑を押しあて、見ゝに、柱
の削りあとに、よく合ひたりと云ふ。

眞他處歸柱削屑押

第九課

おきよと正雄との話

「正雄おいで、お前は、盲ふかり、私は、お前の
先生ふなりて遊びませう。」

「姉さん、それは、面白うござりませう」と、正雄は、おろかけふかりて、目を閉ぢたり。

おきよは、正雄のひざみ、一つの物をおき、
「盲の子よ、これハ、何か。」

正雄は、手みて探りながら、「先生、これは、兎であります。」

「さやう、兎は、どんかけものでありますか。
「兎の毛ハやはらかで、頭よりは、長き耳二つと、

まろき目

二つ、はか

一つ、口

一つあり、

又短き尾

と、四本

の足とがありて、其前足を短く、後足は長くあります。」



「さやう、誠によろし、お前は、兎ふつき、まだ知りたることがあります。」

「兎の口は、上唇が二つふわれ、草や、木の葉や、菓や、おく物などを食ひます。」

「お前は、盲なれど、誠によくゑりて居ます。まかし、かはゆさうに、盲よりは、知られぬことがある。此兎の毛は眞白で、目は赤い。あれかる盲の子よ、お前は、此兎の

如何ふもかえゆらう、きれいなるを見る
ことが出来ぬ、私は、それを悲しく思ひます。
おきよの話の、あまりあれかりうためふ、
正雄も、急し目を開き、身の盲からざりう
を喜びたり。

正雄 盲 探 頭 唇 葉 菓 悲

第十課

めくら

世の中よ、盲の人の、あるぞとは、
童等も能く 知りつらむ。
されど、二つの 目のあける
盲も、世よは、 あるぞか。
文字は、吾等よ、 さまゝの
まとを、目よとり、知らせれど、
文字とめぬ身は、如何みせん、
そをしも見分け 得ざるなり。

おれ等の人を、 諺よ、
あきめくらとは 云ふぞか。
二つの眼は、 ありながら、
見えぬめくらと かる勿れ。
勉めとわらは、 ゆめかたゆみそ。

童能諺眼勿

第十一課

塙保巳一の話

塙保已一は、七さいの時、病ふかゝりて、
盲とかれり。十五さいの時より、琴や
阿んまを習ひしが、もとより好まざりし故
み、其とざるとげざりき。

保已一は、常ふ好みて、人ふ本を讀ませ、又
かういやくをさせて、其聞きたることは、
ことごとくそらんじて、つひに文字を知り
たり。後名高き先生につきて、學問を



かゝ、我が國の書物
は、ほとんど讀み
つくし、程かりき。
かくて、一つの學校
を開きしふ、弟子
となる人甚だ多し。
或る夜、弟子をあ
つめて、かういやく

をなす居たるに、風 吹き來りて、ともゝび
をけたり。人々は、書物の見えざり
故よ、「まばゝおまち 下され」と云ひに、
保巳一は、「あかりがなければ見えぬとは、
さてさて目あきは、不自由なものかな」と
笑へりとぞ。

保巳一のあみたる 群書類従と云へる本ハ、
正へん續へん合せて、三千七十種、其冊數

は、二千八百五十冊なり。其身旨にて、
かゝる大部の本をあみたりは、實に
かんゝんすべきことならずや。

塙 保巳一 琴 常 讀

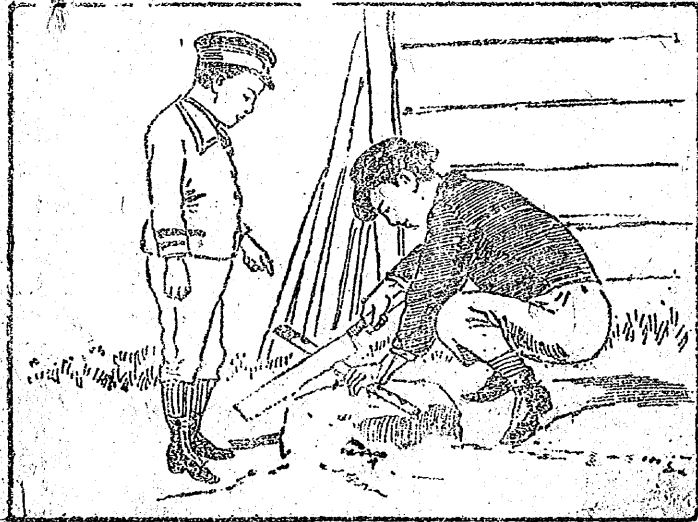
聞 群 從 續 冊

第十二課

次郎と三郎との話

次郎と三郎とは、年一つちがひの兄弟なり。

或る日、父は、一本の笛を取り出し、ふたりが、笛を吹き得るやうに成りたらん時、之をあたへんと云へり。されど、ふたりは、父に
おひて、直にそれを



貰ひたり。今迄ふたりは、何品によらず、貰ひゝ物は、皆二つに分ちたり。故に此笛をも分けんとして、鋸にて二つに切れり。

ふたりは、喜びて各一つづゝ持ちあたり。まかり、此切りゝ笛は、もはや役にあゝぬとき、おどろき悲みて、泣き出せり。其時、父は、又笛の代りに、一疋の犬を



あたへたり。
ふたりは、笛にこりて
犬を二つにハきら
ざりゝが、只犬の
前の方の半分を、
次郎の物とし、後
の半分を、三郎の
物ときめて、ふたり

一ゝよに、此犬をかはゆがれり。

ある日、此犬が、「キャンキャン」と啼きたれど、
父は、出で、其故をたづねたり。次郎は
其時、「どゝさま、三郎が、犬を打ちたの
で啼きまゐた」と云へり。三郎は、又「私
は、私の分を打ちまゐたが、啼いたのは、
次郎さんの分であつます」と云へり。

賞品 鋸役 只啼

第十三課

九年母の話

ある家に、田舎より来りし丁稚あり、九年母を入れたるかどを持ちて、ある方へ使に行けり。

此丁稚は、未だ九年母といふ名を聞きしことなく、又見たることもなかりし故に、これを見ておんど、かどのふたを開きし

しに、大なるみかんの如きものなり。

丁稚ハ、うまさうなる物かなと、一つ取り出して、ながめ居たるに、あやまりて取り、落し、みぞの中にころがし込みたり。



丁稚ハ、これを志すことなひたりと思ひしが、せん方なくて、其のこりを數へ見たるに、丁度八つありけれむ、儲も、さきに九つあり故に、九年母と云ひしものならんと思へり。よりて、丁稚ハ、先方に行きて、おのれり一つ落さゝことをばいえずして、「此八年母をお目にかけます」と云へり。

取次の者、ふしぎに思ひ、「まれハ、九年母では

無いか」と云ひたれば、儲ハ、九年母とは、くだものの名かりいとさとりたれども、つゝみかくはハ、悪き事と心付き、「實ハ、一つ落しました故、八年母と申上げましたと、ぬびたりとぞ。

これは、誰にも吟味せられにはあらぬども、心に悪しと思ひし故、自分より云ひ出しなり。

田舎 丁稚 使 儲

誰 吟味 惡

第十四課

もりねずみ

もりねずみハ、森の中に住む、小さきけだものにして、全体に、はりの如き毛あり。

もりねずみハ、身をちぢめ、球の如くまるくなりて、其はりを起し、身の害を防ぐ

ものなり。

ある日、一疋のもりねずみ、ひとり森にこもりゐて、甚だたいくつせり。

其時、兎の、かたはらを過ぎ行くを見て、「わが友

ハ何故、我と一志よに遊ばぬぞ」と問へり。

兎は、「もりねずみよ、汝ハ、



遊び悪き友なり。汝ハ、我らはなを出せば、
はなを刺し、足を出せば、足を刺す。それ
故に、我ハ、いつゑよに遊ばぬ」と答へたり。

森 全休 球 害 防 友 刺

第十五課

正作病氣になりゝ話

ある日、正作ハ、一人にて、野べに遊びゝに、
其時ハ、丁度暑中にて、あつさはげゝかりゝ

故に、のど甚たかわきたり。然るに、道の
かたまたらの、大なる櫟のかげに、泉の、岩
より落ち來れるを見出せり。

正作は喜びて、直に、其泉の水を飲みゝ
に、氷の如く冷なりゝかを、十分に飲みて、
ひなたに出でゝに、にをかにとゝち悪ゝく
なれり。

正作ハ、急ぎ家に歸りて、どこにつき「何で、



此やうなる病氣
になりたるぞと
あやゝみて怒り
居り。

父は、正作の病を、
水を飲み過ど
たるによりて、
起りたるなりと

さとりたり。

父は、又、あつとて、あまりに多く水を飲む
べらば、あつきところをゐるきたる時、
決して、直に水を飲まば、少く涼み、後
に、飲むべと教へたり。

暑 檜 泉 飲 氷 冷 怒

第十六課

ほねをいみせし馬の話

ある人、市場より、馬に、老ほを負はせて、家に歸り、途にて一すぢの川を渡りたり。馬ハ、此川中にて、石につまづき、何やまりてたふれーらその負ひたるハ、老ほなりー故に、忽ち、水にとけうせ、から身になりたれば、喜びて家に歸れり。

次の日、又老ほを負はせ來至て、川を渡至ーに、馬ハ、前の日のことを思ひ出で、ことー

ほらにたふれ、
又から身に
なりて喜び歸
れり。



主人ハ、馬の
あるぢゑを
さとり、之をこらさんと思ひければ、次の
日には、市場に行き、多くの草鞋を買ひて、

馬に負はせたり。

馬ハ、又例の如く、荷をかろくせんとして、かの川に至りて、ことさらにたふれり。今度の荷物は、水の爲に、かへりて目方數倍まし、馬も、汗をながして、やうやく家に歸れりと云ふ。

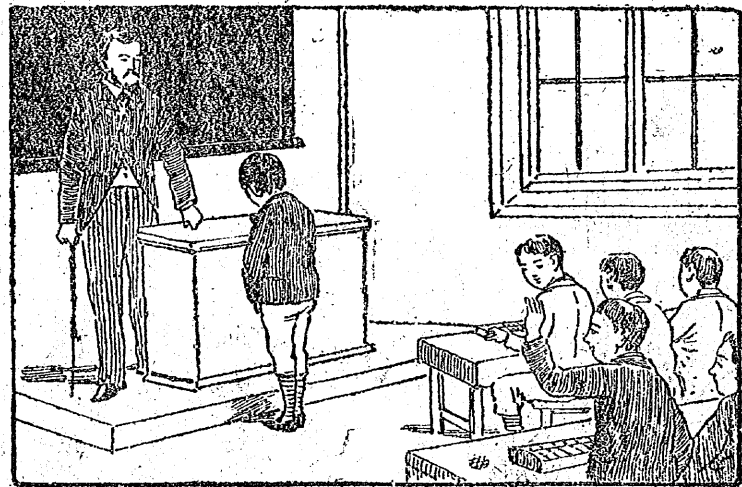
市場 負 渡 草鞋 例 倍 荷 汗

第十七課

正雄の正直

正雄の、かよへる學校ふて、算術の授業中、ひそかに話をなす、生徒ありけり。教師も、之を知らさんため、此後もし話をかす者有らむ、直まをせんと約束せり。故に生徒等も、皆静ふしてゐたるも、忽ち小さかることゑ聞えたり。教師も、聞きあやまりて、一人の生徒をよび出して、之を

をうせんとせり。此生徒も、今迄教師は、いまめられしこと、度々ありし者あり。正雄も、彼の生徒の、をうせられんとするを見て、直しその座を立ち、先生、今のも



私でござります。私は、今とせ算をいたし、半分程出来ましたのふ、ついそろばんにさはりまして、答をくづりました故、思ふほど恥を出したのであります。私ををうして下され」といひ出でたり。

教師も、正雄の正直あるをほめて、其阿やまちをゆるし、前に呼び出で置き、生徒をも、もとの座につかせたり。

それ故に、正雄は、喜び、再びよせ算をはじめ、同級の生徒等も、皆其正直なるふかんしんせり。

算術 授業 生徒 教師

座 再 同級

第十八課

馬

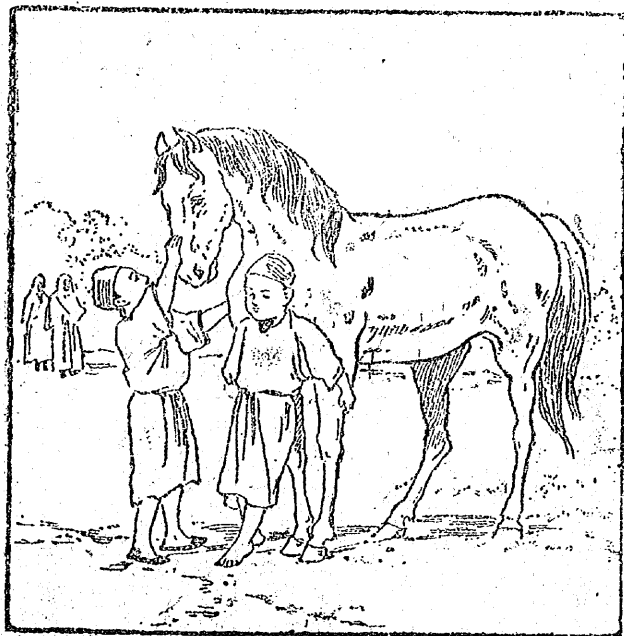
馬は、人のたえみは、最も有用なる獸なり。

汝等は、馬のおもき荷物を負ひて、ここへ行くを見ることあるべし。

馬は、又甚だ足早きもの故に、人を乗せ、或は、馬車を引きて、速に走るものなり。又其せい一つ勇まきものにて、せんぢやうに行けども、恐るゝことあり。

世界中にて、馬の、最もよきは、あらびやの産あり。あらびや人は、我が子の如く

馬をあいき、馬は、又常に、子供と共に
遊びたのゝめり。
子供は、馬の
耳を引き、又
たてがみを取
り付きて下がり
かどすれども、
馬は、かみ又



はけること無しとぞ。

あらびや人は、馬をあいする故ふ、まんせつ
よ扱ひて、決して、むちを以て打つこと
なり。常子は、馬を放ちおきて、用ある
時は、口笛ふてよぶなり。馬は、主人の
口笛を聞くときは、直ふ走り來るといふ。

最 獸 速 走 世 界 扱 放

第十九課

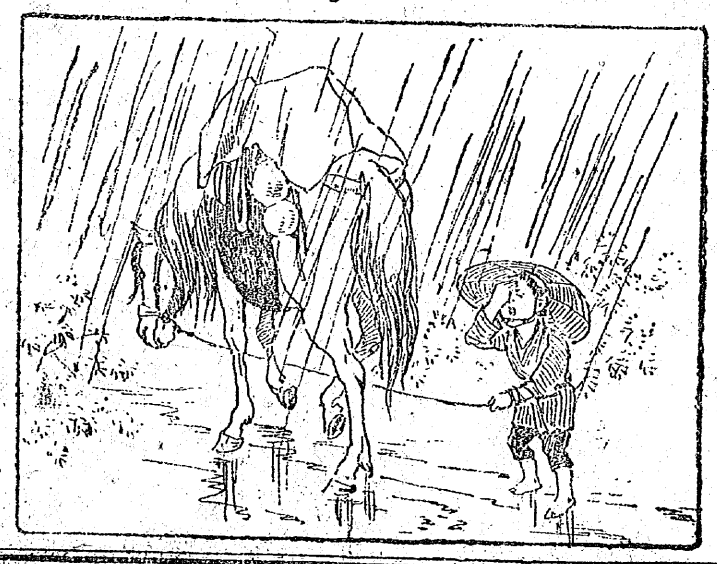
馬の童を助けし話

昔、攝津の國、高つきふ近き村の百姓の子、
六さいふて、馬をひきて、高つきふ行けり。
其歸りよ、雨降りければ、川ふ水出で、
渡るまどかふはざりき。

童は、如何みせんと、困りまこと、考へ居る間
に、日はくれ、雨もいよく強くありて、人
かげも見えぬ故、悲しさのあまり、こゑを

あけて泣き出せり。

其時、馬は、童を
くはへ、やすくと
川を渡り、向の岸
にて、童を放たり。
まかり、一寸先きも
見えぬ程のやみの
夜みて、ことに雨



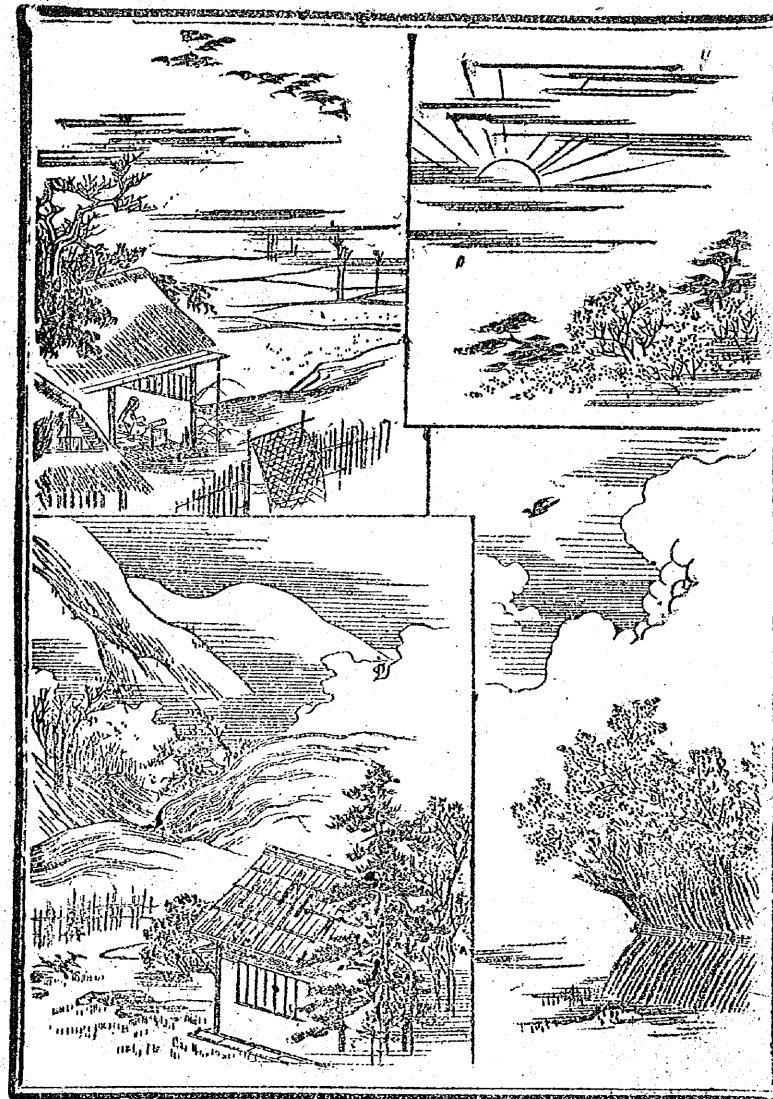
もはげしけれを、童は行く可き方を知らざりしに、馬は、又先に立ちて進みたり。童は、それに力を得て、泣々綱を取りて馬のあとに付きて歩めり。童の家まで、其歸りのおそきをあんじて、むかへの人を出したれども、つひに出あはざりしが、馬は、ちか道をたどりて、童と共に、故なく家もどりしとぞ。

攝津 近村 百姓 強進 綱

第二十課

四季

一年は、十二月にして、之を四つに分ち、春夏秋冬の四季とせ。三四五の三つきを、春と云ひ、六七八の三月を、夏と云ひ、九十十一の三つきを、秋と云ひ、十二一二の三つきを、冬と云ふなり。



春

わがひのものとあさほらけ
 あすめるひかげ あふぎみて
 もろこゝ人も こまびとも
 春たりけふをを 志りぬべ。

夏

雲間にさけふ ほとぎに
 かきぬにほふ うつぎはか。

夏來にけりと、あめつちに、
あらそひつぐる、花ざどり。

秋

砧の響、身にきみて、
やまよのかりも、あさるかり。
やまともろこ、あしかべて、
れなじあはまの、秋の風。

冬

まどうつあられ、にたのゝも、
ふもとのおちを、峯のゆき、
みやこのうちも、やまごとも、
ひとつにさめる、冬のそら。

季秋冬砧響峯

第二十一課

酒井忠勝の話

えはきと儉約とは、同じやうに見ゆれども、

眞は、大にさどなり。志はきものゝ徒
に金銭をあつむるのみにて、何事にも
つかふ事をきらひ、儉約ある者は、むだ
をはぶきて、金銭をたくはへ、そのつかふ
べき所には、これを惜まじ。故に、志はき
ものは、人にきらはれ、儉約ある者の、人
にうやまはる。

酒井 忠勝、常にそばにて使ひ、小坊主に、

紙よりをさへらへ、
させ、扇をこに入
れおきて、状をこの
封に用ひたり。

或る時、近習のさぶ
らひ、扇をこより、
紙よりを取り出し、
紙よりの真中にて



封をつけ、あとさきを切り捨て、狀ばこ
を持ちて立たんとせり。

忠勝、これを止め、汝ハ、身を持ちくづすべき
ものなり。さゝやのかる紙よりかれども、
かた端にて封を付くれば、二度の用を
足すべきに、真中にて封をつくる故、一
度の用のみかりとさとされたり。

忠勝は、大名を逢ひ、たゞ一本の紙よりも、

むだにせざらんことをつとめ、は、實に
儉約を知る人と云ふべし。

酒井 忠勝 儉約 金錢

扇 狀 封

第二十二課

作太郎の鳩

正雄は、一里ばかりへだたりたる田舎に、
作太郎と云へる従兄を持てり。此作太郎

は、一羽の鳩を久しくかひ置けり。

或る日、作太郎は、其鳩を持ちて、正雄のもとへ遊びよ來れり。正雄は、鳩を珍しが至て、いろ／＼の話を、作太郎に問ひたり。

作太郎は、鳩のせい／＼つ、溫和みて、よく人に馴れ、又よく其すみかを おぼえ居る故に、遠方へ連れ行きて、之を放つ時は、必ず其

家よかへる

話を話

たり。

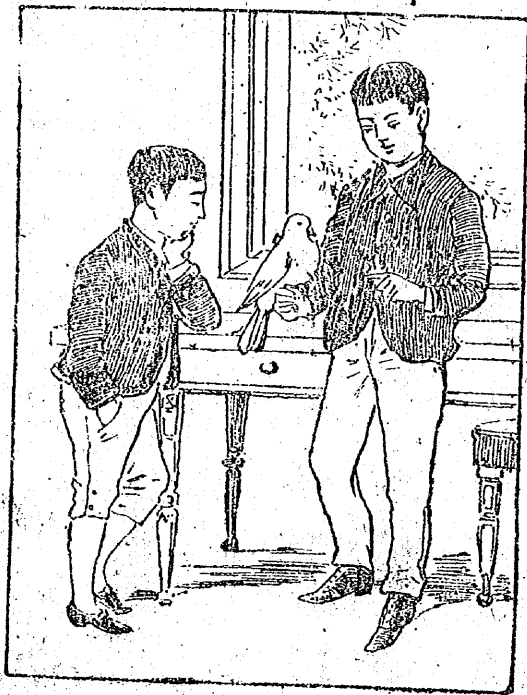
正雄は、も

此鳩を

放ちやらば、

作太郎の家に歸るやと問へり。作太郎

ハそれはもちろんのさとなり、此度鳩



をつれ来しも、自分の家へ、手紙を送らん
ため、かりと答へたり。正雄は、鳩に手紙
の便をさすると云ふことを聞き、大に
之をあやしめり。
作太郎は、うすき紙に、極小き文字にて、
手紙の文言をえた、め、これを鳩のくび
につけて、放ちやまゝに、矢の如くに飛
びゆけり。

鳩 里 從兄 置 溫和

遠 文言 矢

第二十三課

作太郎の手紙

前の鳩は、郵便
より數倍早く、
手紙を、作太郎の
家よとけたり。



作太郎の、手紙の文は、

私と今日午後三時、當地の森の
正雄、私のあつた喜び二人といふの
おもひつき遊びいふ一層、又明日を
日へう故正雄私の二人をつれ公園へ遊びに
来ると叔父様より直話されあつた
私、明日の朝早くから入る心算
で参上以上

九月廿七日

作太郎

御両親様

作太郎の両親は、此手紙にて、作太郎の無事
あることを知り、大に安心せしむらん。

郵便 午 當地 候 参

公園 様 両親

第二十四課

桑つみ女

昔、支那の齊と云へる國に、一人の桑つみ
女あり。此女のえりには、生れあふら
に、大なる瘤あり。故に、人々宿瘤と
名づけたり。

ある時、宿瘤、桑をつみて居たるに、たまふ
國主の出遊あり。かば、多くの人々は、皆
其有様を見んとて、走り行けり。然るに、
宿瘤のみは、あき目もふらば、桑をつみて

居たる故、王之を
怪みて、宿瘤を召し、
其故を問はれたり。
其時、宿瘤ハ父母より、
桑をやれとハ言ひ、
付けられたと、大王
を拜せよとハ言ひ、
付けられ」と答へ



に、王、甚だかんぞんせられて、「汝は、實に
奇女あり、えりに瘤あるは、まことに
惜しきことあり」と云はれたり。宿瘤は、
又「人は、心をたい一とする故、瘤あり
とて、何もなげくに及ばば」と申上げた
れば、王は、再びかんぞんせられ、まことに
かしこきものなりとて、宮中に召しいだ
されたり。

宮中の女等ハ、宿瘤の入り来るを聞き、皆
衣服をかざりて、待ちまうけしに、宿瘤ハ、
衣服もきはめてそまつにて、ことにはえり
に瘤ありて、甚だみにくかりければ、皆々
口をおほひて笑ひたり。王ハ、之を見て
かたく其笑をとどめられしのみからば、
やがて、宿瘤をきりきに立てられける。
後、王、きりきのいさめを入れて、いたく

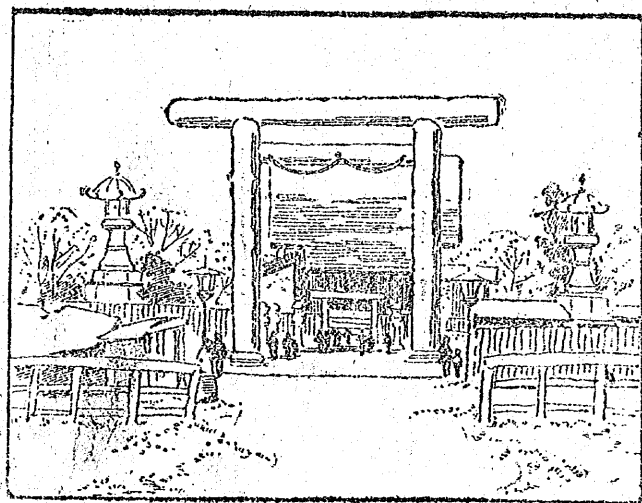
宮中のつひえをげんじ、それをもて下を
めぐまれしかば、國まはしく富み民よく
治まりて、つひに齊國のいきほひ、近國に
迄も及べりとぞ。

支那 齊 宿瘤 王 怪

召 拜 奇 及 宮

第二十五課

招魂社



招魂社を、吾等の國を守る爲めに、いのち
をおとしく人を祭
れるやうなり。
故に吾等、招魂社に
まゐる時は、信實に
其恩を謝さべし。
つぎに招魂祭の歌
を志るに。

命を捨てゝ、ますらをが、
ゑてゝ功を、あえつちの、
有るべきかぎり、語りつぎ、
いひつぎ行らむ、後の世も。
妻子にわかれ、親をおき、
君が御爲めとつくゝたる、
其いさをこそ、やまごくら、
後の世かけて、おほゑをれ。

郊音集

命を捨て、ますらをが、

有るべきかぎり、語りつぎ

いひつぎ行らむ、後の世も。

妻子にわかれ、親をおき、

君が御爲めとつくしたる。

其いさをおそやまぢいんら

後の世かけて、かほゝをれ。

親きやうだいの名をさへふ。

かゝやかゝたるますらをハ。

此世にあらぬ後にもほ、

國の志づめとかりぬべし。

招魂社 祭謝 捨

功語君爲

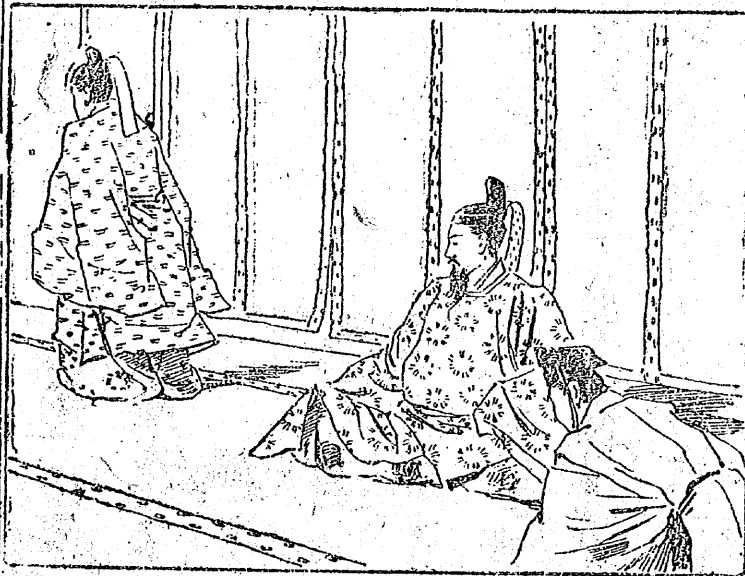
第二十六課

行成と實方との話

或る時、大納言・行成、中將・實方と、殿上にて
参り合ひ、何事をか論ぜしが、實方も、
たへ得ずして、行成の冠を打ち落し、小庭
に投げすてたり。

其時、行成は、少しもさむがほ、人子冠を
取らせて、之をいたゞき、かうがいみて、かみ
のみざれをつくろひ、静に實方に向ひ、
「かく冠を打ち落さるゝ程のまゝ、身は

おほえかし、如何
かる故にか承る
たり、御返答に
とりてハ、此方
にも、致し方あり
と、つめよせたり。
實方は、大にまぢ
入り、一言の答



をもかゝ得ばして逃げ去れり。折柄一條
天皇此ありさまをぶらんありて、行成の
心のひろやかかるをかんじたまへり。

其後、天皇、行成を藏人頭に任じ、實方の
中將をはぎて、陸奥守とさされり。

藏人頭は、勢有るやくにて、國の守は
いやまれゝやくなり。まして、陸奥かど
の遠國へやらるゝは、流さるゝやうに、

おもひゝかるべし。されば、天皇も、行成
と實方との、きまやうを計りて、かくハ
成したまひゝかり。

納言 事 論 冠 承

一條 藏人 任 勢

第二十七課

かうまん かる 男

一人の、かうまん かる 男 あり。 水瓜 畑

の傍にある、櫛の根に腰打ちかけて
いこひ居り、櫛の實のかりて居るを見て、
ひとり頭をふりながら、「此大きな櫛の木
に、あんか小さな實がかりて、あのほそい
つるには、あんか大きな水瓜があるとは
何と不釣合ではいか。 もゝ自分が
世界を造りたから、櫛の木に水瓜を
からせて、あのつるには、櫛の實をから



せるやうにせんもの
を、ア、不都合を造り
やうだ。

かくひとりごとせし時に櫛の實一粒

落ち來りて、かうまんの鼻を打ちたり。
男ハ、大に驚き、ア、かうまんが過ぎ、
た故、忽ちに鼻を打たれた。も、此櫛
の實の大きさが、水瓜のやうで有るた
からば、この鼻ハ、つぶされてしまふたで
あらう。

男 水瓜 畑 造

不都合 粒 鼻

第二十八課

虎と狐との話

或る時、虎一疋の狐を捕へて、之を食
はんとせり。其時狐は、虎に向ひて、
「我は、けだものの王として、天より下り
ものなり。汝若し我を食ふ、忽ちばつ
をかうぶる可」と云へり。

併虎は、之を信ぜざり。故に、狐は又、

「汝、若し我が言を
うたがはさ、我が後に
従うて来る可し。
すべてののけさもの、
皆必ず我を畏れて
逃げ走らん」と云へり。
虎は、狐の言葉を
ためさんと、其あと



につきて歩みに、すべての獣ハ、皆虎
をおそれて逃げ去れり。されど虎ハ、已
を畏れて逃げいと心附かば、真に、狐を
畏れしことと思へり。

されば、主人の勢、まゝは親の威光をたの
みて、威張るものを、諺に「虎の威を借る
狐」と云ふなり。

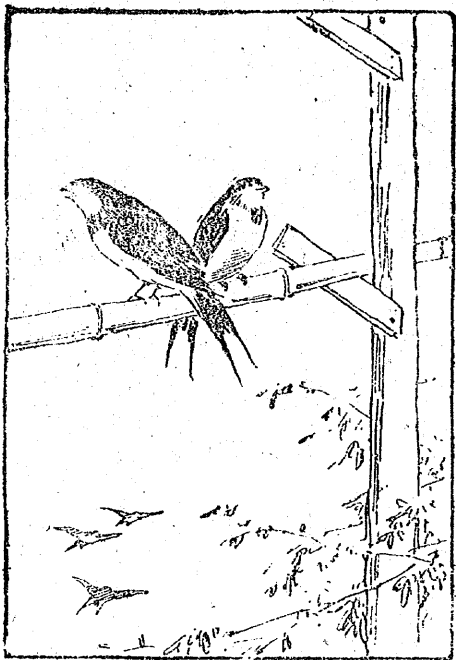
虎若可併必附威張借

第二十九課

燕

燕は、雀ほどの大きさにて、背は黒く、腹は白く、胸ハ赭石色あり。

つばさと尾とは長くして、尾は、其先二つに分れ、飛ぶと甚だ速にして、自由に身をかへすものあり。又くちばしハ、短けれど、深くさけて、飛びかける間に、



小虫をとりて

食ふ。

燕ハ、春來りて、

巢をつくり、

秋に至る時

ハ、去りて南方の暖地に行くものあり。

されど毎年ふる巢を忘れずして、かへり、来るもの多し。

來とや、來とつむくらめ。

おやもひかも。

ひねもにかなり樂み、

その巢をいぞ、

とほきくふべふ

たち別るとも。

かへり來とや、我が宿に、

歸り來とや、つばくらめ。

燕雀背腹胸臙石巢別

第三十課

燕の巢をうばひ雀の話

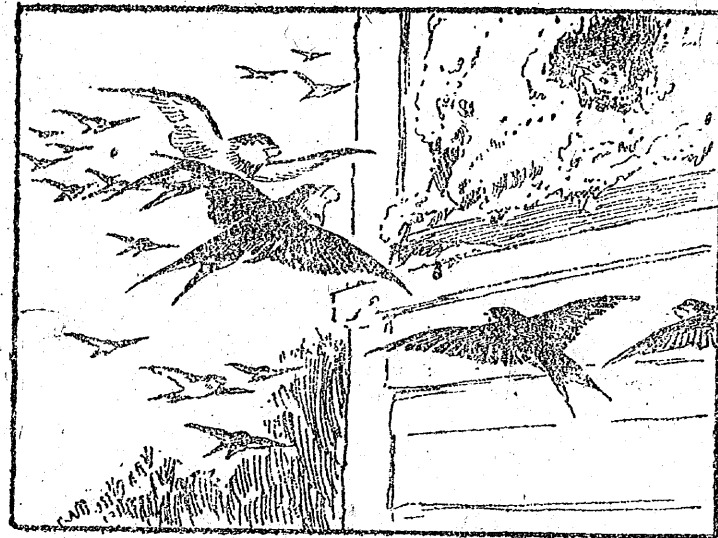
燕は、人家の軒などに、巢を作る。その

巢は、泥を以て、かべの如く、巧に外が土

をぬり、其中には、毛又は羽などを

入れて、暖にこゝろへ置くものなり。

或る時、一羽のゑるがとき、雀、燕の居ら



ざるをうかゞひて、
其巢に入り、已
が卵を生まんと
せり。

燕は、歸り來りて、大
におどろき、直に
立ち去らんことを
乞ひたれど、雀ハ、

己が巢なりと云ひ張りて、さらに承知
せざりき。

燕は怒りて、多くの友だちを呼び集め、共
に泥を運びて、忽ち巢の口をぬりふ
さぎたれば、雀ハ、ぬりこめられて、色々に
さめざり、遂に出づるおとを得ざり
とぞ。

すべて、自ら骨折るおとをかさずして、他の

物をうばんとするものは、此雀の如く、うき目にあふものなり。

軒泥巧乞呼集運臂

岐阜縣飛騨国使用

尋常小學讀本卷之三終

明治二十年四月廿九日版權所有屆

文部省大臣官房圖書課藏版

此書籍ハ賣捌人ノ手ヲ離ル、トキ何等ノ名義ヲ附スルモ定價ニ超過セル金額ヲ買手ヨリ拂ハシムルコトヲ許サズ

定價金七錢五厘

東京市京橋區銀座壹丁目廿貳番地

發賣所 大日本圖書株式會社

大阪市東區博勞町四丁目拾七番屋敷

發賣所 全支社

